

27PB-am127S

臨床分離インフルエンザ菌の薬剤感受性と A549 細胞に対する付着性

○湯澤 優奈¹, 輪島 丈明¹, 瀬山 翔史¹, 中南 秀将¹, 野口 雅久¹ (¹東薬大薬・病原微生物)

【目的】近年、小児科領域における中耳炎や気道感染症の起炎菌にしめるインフルエンザ菌の割合は増加している。我々は、インフルエンザ菌の効果的な治療法立案のために、インフルエンザ菌を継続的に収集し、薬剤感受性の動向を解析している。今回、薬剤感受性と感染初期に寄与していると考えられる付着性の解析を行った。

【方法】東京都内の大学病院で 2013 から 2014 年に分離されたインフルエンザ菌 159 株を使用した。莢膜型別、 β -ラクタマーゼ遺伝子の有無及び付着因子遺伝子の有無は PCR 法で解析した。最小発育阻止濃度は、微量液体希釈法により測定した。付着能は、ヒト肺胞上皮細胞株である A549 細胞を用いて評価した。

【結果・考察】収集菌株のうち、小児科由来株は 56.8%であり、全て無莢膜型であった。薬剤感受性を測定したところ、アンピシリン耐性株は 81.8%であり、そのうち 13.9%は β -ラクタマーゼ遺伝子を保有していた。クラリスロマイシン耐性株は、29.5%と以前の報告と比較し減少していたが、2014 年に *mefA* を獲得したクラリスロマイシン高度耐性株が 1 株出現していた。また、この株はペニシリン系およびテトラサイクリン系薬にも耐性を示す多剤耐性株であった。臨床分離株の A549 細胞に対する付着菌数を測定したところ、低付着性株と付着菌数が 10 から 10^2 倍高い株（高付着性株）が認められた。高付着性株の特徴的な付着因子や薬剤感受性の関連は不明であったが、本研究より、新たな多剤耐性菌の出現と高付着性株の存在が明らかとなった。また、付着因子に関しては、現在知られている因子以外に細胞付着性に寄与する因子が存在することが示唆された。